英作文における「場面」の重要性
――Denomial Verbsを用いた英作文の分析から――

川　村　義　治

The Significance of Context ―― How to Use Denominal Verbs in English Compositions ――

Yoshiharu Kawamura

Abstract

The purpose of this paper is to analyze how students describe everyday actions in English, and to show the significance of the contexts in which the actions take place when students compose English sentences.

Many Japanese students tend to memorize English words by translating them directly into Japanese equivalents. They do not give consideration to the context in which the words are used. Thus, they tend to translate Japanese sentences into English ones word by word or phrase by phrase. That is why they are unable to write good English sentences.

I set up a conceptual model of general actions which are involved in certain semantic roles: agent, instrument, patient, place, state. In a typical action an agent(actor) does an act with an instrument which affects a patient (the movable object of the act) , as a result, the location or state of the patient is changed. I make up Japanese sentences which reflect the conceptual model. I ask students to translate the sentences with denominal verbs. Denominal verbs are verbs which are converted from common nouns without any change in form. Many of them are originally nouns which have the meanings of agent, instrument, patient, place, and state. Those denominal verbs indicate to students that they should focus on the context of a target sentence and see it from different angles when they translate it into an English sentence. That might be an effective way to cultivate composition ability.

1　はじめに

授業の英作文は、「制限英作文」と「自由英作文」に分けられる。「制限英作文」とは、いわゆる和文英訳で、新しい語彙や文型の学習の定着を促すために行われる作業である。和文英訳は、伝える言語形式も内容も指定されているので、communicativeでもcreativeでもないとして、近年人気がない。一方「自由英作文」は、日記を書かせたり身近な話題についてまとまった内容の文章を書かせたりする。和文英訳は効果的な学習方法であるが、面白味に欠けるのに対して、「自由英作文」は自己表現の場であり、学習者中心の学習として推薦される。実際問題としては、「制限英作文」と「自由英作文」の両方の長所を取り入れた学習が望ましい。自由に英作すると言っても、語彙や文型の選択、パラグラフの形成など様々な問題があるので、それぞれの方法の長所・短所をよく理解して課題を与える必要がある。

話すにしろ書くにしろ、言葉を発する場面の重要性が以前から指摘されている。言葉は一種の記号であるが、場面の内容をすべて写す鏡ではない。話者（書き手）はひとつの視点から主観的に場面を言語化する。同じ場面を別の視点から別の言語表現で表すことは可能である。つまり、場面は多様な解釈＝表現を許すテクストである。本稿では、denominal verbs（以下、名詞転換動詞と呼ぶ）を利用した英作文を学生に課し、彼らの解答から使用動詞を分析して、英作文における「場面」の重要性を論証するとともに、その指導法を提案する。

2　「場面」の定義

本稿における「場面」の定義は次のようになる。

（1）具体的な動作が行われる日常生活の一場面である。

（2）具体的な動作とは、典型的には「動作主」が「道具」を用いて対象（「被動作主」）に働きかけ、対象を別の「場所」へ移動させる、あるいは別の「形態」に変えることである。

（3）その動作は具体的な目的を達成するために行われる。

（4）場面は視点により異なる解釈＝表現を許す。

「場面」とは何か。本稿で扱う場面は、（1）日常生活の具体的な動作が行われる場面に限定する。生理的な活動や抽象的な思考は含まれない。（2）その具体的な動作は、動作主が道具を用いてある対象に働きかけてその対象の位置や状態に

変化を起こす行為である。その際、道具はいつも使用されるわけではない。しかし、例えば蹴る（kick）動作は道具を用いないが、対象に打撃を与えるために足を道具として機能させているという意味では道具という要素は場面には不可欠である。(3) 動作は具体的な目的を達成するために行われる。ただし、その目的は必ずしも言語表現として表出されるわけではない。(4) 最後に、場面は視点の取り方により多様な解釈と表現を許すと考える。つまり、ある場面の解釈＝表現はある視点に支えられているのであり、異なる視点からは異なる解釈＝表現が可能である。例えば、動作主よりも被動作主に話者が注目すれば、受動態が採用されて、動作主は必ずしも表現されない。

以上のような場面解釈に基づいて場面の構成要素を図式化すると、次のようになる。矢印はエネルギーの流れを示す。

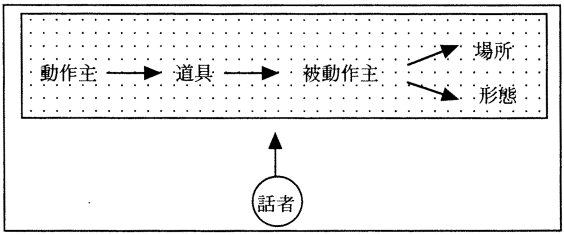

図1

3　名詞転換動詞を用いた英作問題

語形成の過程の一つに「転換」（conversion）がある。転換は単語の形はそのままで品詞だけを変える操作なので、ゼロ派生とも呼ばれる。「転換」が興味深いのは、形態変化がないにもかかわらず、品詞転換した語が何の支障もなく学習され使用されるのかという点である。ここに「転換」を支える場面の存在が浮上してくる。

本稿では、名詞から動詞に転用された名詞転換動詞を取り上げた。多くの名詞転換動詞は、mop、 pin、 tape のようなありふれた日常品を表す名詞を転用した動詞であり、具体的な生活場面と密着した動作を表す。また、多くの名詞転換動詞は、図1で示した「場面」の構成要素である、「動作主」、「道具」、「被動作主」、「場所」、「形態」、という意味役割に相当する名詞が動詞化して作られている（これらの意味役割は、フィルモアの格文法を参考にしている）。名詞転換動詞に注

目するポイントはここにある。

本稿では、これらの五つのタイプに属するそれぞれ四つの語彙を用いて、表1（本稿末に付記）のような英作問題を作成した。各設問で使用が指定されている語彙はみな動詞として使える名詞転換動詞であるが、被験者にはその事情は知らせない。学生がそれらの語彙をどのように用いて課題文を英訳するかを調査するためである。動詞は、文中の項を統語的にも意味的にも関係づける働きをする。よって、使用動詞を調査することにより、学生がある動作が行わる場面をどのような観点から解釈して言語化したかが分かる。その結果は、場面を構成する要素や名詞転換動詞の機能について指導するためのてがかりとなる。課題の英作文20題は、新大学生72名を対象にして、解答時間20分で行われた。

表1の英作問題に載せた名詞転換動詞とその種類

動作主型　―「動作主」の役割が動作を表す。
使用語：referee、nurse、pilot、 guard。

道具型　―「道具」の機能が動作を表す。
使用語：button、telephone、mop、hammer。

被動作主型―「被動作主」は動作を受けて変化する対象であるから、動作の対象が動作をあらわす。
使用語：carpet、wax、water、butter。

場所型　―「場所」の機能が動作を表す。
使用語：box、stage、air、file。

形態型　―「形態」は動作の結果であるから、結果から原因となる動作を表す。
使用語：group、curl、cash、pile。

4　結果分析

第1問～4問は「動作主」型の名詞転換動詞を用いた課題、以下第5問～8問は「道具」型、第9問～12問は「被動作主」型、第13問題～16問は「場所」型、第17問題～20問は「形態」型である。学生の解答から、使用動詞を調査した結果が表2（本稿末に付記）である。項目「その他」は、ある語句の表現が一人だけの場合、「v.i.」は動詞が自動詞用法で使用されている場合、「日本語」は英訳できないので課題文の日本語動詞をそのまま書いた場合を指す。なお、数字は人数を示す。

4.1「動作主」型名詞転換動詞―第1問～4問

第一問の「レフリーを務める」では、“ He was a referee in the game ” とbe動詞を用いた学生が一番多く、以下play、do、workと続く。refereeを動詞として使用した学生は9名であった。「務める」の英訳ができないと答えた学生が11名いたが、be動詞で簡単に表現することを思いつかなかったと推測される。playは “ play the role of ”、doは “ do the job of ”、workは “ work as～ ” での使用が目立つ。なお、本稿の目的上、解答が文法的に正しいかどうかは考慮から外してある（ただし、若干の支離滅裂な文は「無記入」の人数に加えた）。第2問の「看病する」は、63名の学生がnurseを動詞として用いた。第3問の「飛行機を操縦する」は、pilotを使用した学生が37名で、be動詞が21名と続く。flyやsteerを使用した学生はいない。第4問の「警備する」は、69名の学生がguardを動詞として使用した。

4.2「道具」型名詞転換動詞―第5問～8問

第5問の「ボタンをかける」のできはよくなかった。putを用いた学生と、「かける」を英訳できないと答えた学生がそれぞれ25名ずついた。putを用いた英作の多くは、“ put the buttons on the jacket ” のような表現である。これでは上着にボタンを取り付ける意味に解されてしまう。buttonを動詞として使用した学生は２名だけで、fastenまたはdo upを用いた学生はゼロであった。「ボタンをかける」というあまりにも日常的な動作は、かえって英訳がむずかしいのかもしれない。反対に、第6問の「電話をかける」は、大半が正解であった。telephoneを用いた学生は43名、telephoneのかわりにcall、あるいは “ give a call ” を用いた学生は17名であった。第7問の「床をふく」では、「ふく」が英訳できないと答えた学生が27名いた。一方で、cleanを用いた学生が9名いた。「床をふく」とは「床をきれいにする」ことであると発想を切り替えたのであろう。また、“ mop on the floor ” のようにmopを自動詞として使用した学生が14名いたことも目を引く。第8問の「ハンマーで打つ」は、“ hit with the hammer ” と表現した学生が46名おり、hammerが道具名詞として定着していることを示している。

以上の結果から、学生は「ボタンをかける」「床をふく」といった日常的な動作の英訳が得意ではないことがわかる。buttonやmopの動詞用法を教えるとともに、道具名詞は共起する動詞と一体的に連語的表現として学ばせる必要があるだろう。

4.3「被動作主」型名詞転換動詞―第9問～12問

第9問「カーペットを敷く」では、carpetの動詞用法はゼロである。その結果、学生の解答はputを用いる（24名）か、あるいは「敷く」がわからないと答える（27名）かに大きく分かれた。第12問の「バターをぬる」でも、butterの使用は1名のみで、putの使用は16名、「ぬる」が英訳できないと答えた学生は37名もいた。「敷く」と「ぬる」は、ともにspreadで表現できる。spreadはある物を平面的に広げるという意味なので、ぬり広げたり覆いかぶせたりする動作を表わす。「カーペットを敷く」「バターをぬる」という課題文から、カーペットとバターを広げるイメージを想起することができればspreadの使用につながったかもしれない。しかし、多くの学生は「敷く」と「ぬる」に直接対応する英単語が存在するという思考から抜け出せなかったと推測される。ちなみに、第12問でspreadを用いた学生は4名いたが、両方の課題でspreadを用いた学生はゼロであった。第10問の「ワックスをぬる」でも「ぬる」がわからないとする学生が16名いた。また、waxを“ wax on the floor ”のように自動詞として使用した学生が16名いた。これは、第7問の「床をふく」の場合と同じで、床（floor）が“ on the floor ”として常に「場所」であると固定的に捉えられているせいであろう。第11問の「水をやる」に関しては、waterあるいは“ give water ”で的確に表現した学生が多くいた。

4.4「場所」型名詞転換動詞―第13問～16問

第13問の「箱詰めする」と第15問の「風に当てる」は、「詰める」「当てる」を英訳できないと答えた学生がそれぞれ18名、25名いた。「風に当てる」については無記入の学生が16名もいた。なぜ「詰める」と「風に当てる」は英訳しづらかったのか、その原因はこれまで経過から明らかである。学生が「詰める」あるいは「風に当てる」という言葉だけに注目して英語に置き換えようとしたからである。言葉が発せられる場面を頭に描いて、だれが何のために何をするのかを日常経験に照らして推測すれば、英訳する手がかりがつかめたはずである。

第14問の「上演される」は、stageを用いた学生が9名、playを用いた学生が22名いた。一方で、これらの動詞を劇（Hamlet）を主語にして自動詞として用いた学生が17名いた。その理由はよくわからないが、演じるという行為（動詞）をはさんで演じる人（主語）と劇（目的語）との関係を対立的に捉えるSVO構文の論理を理解していないからではないかと推測される。第15問の「ファイルに入れる」に関しては特に問題はなかった。

4.5「形態」型名詞転換動詞―第16問～20問

第16問～20問に関しては、18問の「糸を指にくるりと巻く」の出来がよくなか

った。「巻く」を英訳できないと答えた学生、無記入の学生がそれぞれ13名いた。

4.6　英作文にみられる学生の英語力の特徴

以上、学生の英作文の分析から、彼らの語彙、作文の特徴は次のようにまとめられる。

1.　語の意味を具体的なイメージを通して理解していない。

spreadは、「カーペットを敷く」「バターをぬる」の両文で使える。しかし、その意味を「広げる」という日本語に置き換えて暗記すると多様な文脈で活用できない。spreadは、ある物を平面的に広げるというイメージで理解していれば、「敷く」「ぬる」という日本語に引きずられないですむ。一方、「飛行機を操縦する」は、機械あるいは機器としての飛行機に注目すればoperateやcontrolが動詞の候補にあがり、空を飛ぶ機能に注目すればfly、操縦桿に注目すればsteerが候補にあがるはずである。答案から見る限り、学生の語彙学習には、語の具体的なイメージの把握が欠落しているように思われる。

2　英単語を符号的に当てはめようとする。

多くの学生が、日本語対英語を1語対1語の関係で捉えようとする傾向を持つ。その結果、「レフリーを務める」の「務める」に対応する英単語が思い浮かばないという理由で、11名の学生が英作ができないと答えた。「ボタンをかける」の「かける」、「モップでふく」の「ふく」がわからないので、それぞれ25名と27名の学生が英作を断念した。

3　英語のSVO構文の基本的な意味関係を理解していない。

SVO構文の典型的な意味は、動作主+動作+被動作主であり、その後に場所や時間や手段を表す語句が続く。「床をモップでふく」「床にワックスをぬる」では、「床」は単なる「場所」ではなくて動作の影響を受ける「被動作主」の役割を担っている。しかし、学生は場所を表す語は自動的に「場所」の役割をはたすと考えているようで、“ mop on the floor ”“ wax on the floor ” と解答する。英作するまえに表現する内容を英語の意味関係の中で捉え直すよう指導する必要があると思われる。

4　問題文の内容を場面に即して捉えない。

「クッションを風に当てる」では、英作ができない理由として、「当てる」が

英訳できないと答えた学生が25人、無記入の学生が16人いた。これらの学生が「風に当てる」を英語にできない原因のひとつは、「風に当てる」とは具体的にどのような動作をするか、なぜ風に当てるかを、日常の生活場面に基づいて類推しないからだと推測される。

１、２、３の特徴も根本的には場面を考慮しないことに結びつく。語のイメージは、具体的な使用場面を考慮して初めて理解できる。また、「レフリーを務める」という課題では、レフリーは試合で何をするか、「床をモップでふく」という課題ではなぜ床をふくのかを考えれば、“ judge the game as a referee ” や “ clean the floor with the mop ” と表現することは可能である。さらに、動作の場面を意味役割の観点から捉えることができれば、「床にワックスをぬる」における「床」が動作が行われる単なる場所ではなくて動作の直接の対象であると認識できるはずである。このように、言葉（日本語）を単に別の言葉（英語）で置き換えるのではなくて、言葉が使用される場面を考慮することによって、豊かな表現力の形成につながっていく。

5　指導法の提案

5.1ボトムアップ式

まず最初に、何の条件もなしに課題文「彼は試合でレフリー（referee）を務めた」を英作させる。英作ができない学生は「務める」の英訳でつまずく。そこで、例えばサッカーの試合を例にして、「彼」がゴールキーパーとして試合に出場すればどう表現するかを問いかける。具体的な場面を意識させると日本語にとらわれなくなり、それまで「務める」の英訳にこだわっていた学生もとりあえずbe動詞を用いて “ He was the goalkeeper. ”“ He was a referee in the game. ” と答え始める。次に、レフリーが試合で何をするかを問いかけて、「レフリーは試合を判定する」、だから「『彼』はレフリーの仕事をした」と学生の思考を広げていく。そうすれば、“ He judged the game as a referee. ”“ He did the job of a referee. ” といった表現へ学生を導くことできる。最後に、“ He refereed the game. ” を示して、動作主名詞が動詞になりえることを伝える。

その他のタイプの名詞転換動詞に関しても、最初と最後の指示は同じである。例えば「道具」型の例文である「床をモップでふいてくれませんか」の英作は、次のように指導する。多くの学生は「ふく」の英訳に戸惑うだろう。そこで、床がどのような状態になっているときモップで「ふく」のかを問いかける。つまり、「場面」を想起させる。「床がよごれている」「床が濡れている」等の答えが返っ

てきたら、モップを用いてその状態をどうするのか、モップの働きについて再び問いかける。そうして、「汚れをふきとる」「水をふきとる」「床をきれいにする」等の返答をてがかりにして、英作にもう一度取り組ませる。“ Will you wash the floor with the mop? ”、“ Will you dry the floor with the mop? ”、“ Will you clean the floor with the mop? ” といった解答が得られる。最後に、“ Will you mop the floor? ” を示して、道具名詞の動詞用法を教える。

5.2トップダウン式

まず最初に、図1の「場面」の構成図を学生に説明して、日常生活の具体的な動作が行われる場面の典型的な意味関係を周知させる。次に意味役割に対応する名詞転換動詞を用いて英文を書かせる。例えば、課題文「彼は試合でレフリー（referee）を務めた」では、動作主であるrefereeがそのままレフリーの機能を表す動詞として使用できることを知らせて英文を書かせる。以下、「道具」型、「被動作主」型、「場所」型、「形態」型の例を次々に英作して場面の意味関係をひととおり理解させる。その後、英作問題に取り組ませる。今回は、課題文の日本語を意味関係から捉え直させて、どの要素が動詞として使用可能かを考えさせてから英作させる。

最後に、同じ課題文を今度は名詞転換動詞を用いないで表現させる。これは、ボトムアップ式のときと同じで、「彼は試合でレフリー（referee）を務めた」ならばレフリーの役割や目的、「床をモップでふいてくれませんか」ならばモップの機能や使用場面の状況を具体的に検討させて、多様な英語表現が可能であることを経験させる。

6　まとめ

このようにして、英作をするときにはある動作が行われる場面をはっきり想定することを学ばせる。それは、場面がどのような状態にあるのか、動作主は何のためにその動作をするのか、道具の働きは何か、何が動作の対象なのか、対象はどう変化するか等に関してたえず意識することである。換言すれば、それはひとつの見方にとらわれないで、様々な視点から場面を眺め、場面を解釈することである。たえず場面を想定し、多様な視点からその場面を捉えること、これが表現力のポイントであると考える。名詞転換動詞を用いた和文英訳は、このような表現力を学ぶきっかけを与えてくれる。

References

Clark, Eve and Herbert Clark. 1979. “When nouns surface as verbs.” *Language* 55. Pp.767-811.

Fillmore, Charles J. 1968. “The Case for Case.” in Emmon Bach and Robert T. Harms, eds., *Universals in Linguistic Theory*. Pp.1-88. New York. Holt. Lanagacker, Ronald W. 1987. “Nouns and Verbs.” *Language* 63. Pp.53-94.

影山太郎. 1987.『日英比較　語彙の構造』.　松柏社.

影山太郎. 1997.『語形成と概念構造』.　研究社.

鳥飼慎一郎. 1996.『基本語彙を使った発展英作文』.　朝日出版社.

資料

各文の最後に付記された語を用いて英作しなさい。ただし、英作できない場合は、その理由を簡単に説明しなさい。

1　彼は試合でレフリーを務めた。（referee）
2　彼は一晩中妻を看病した。（nurse）
3　圭子さんは飛行機を操縦できる。（pilot）
4　5人がその要人（VIP）を警備する。（guard）
5　上着（jacket）のボタンをかけなさい。（button）
6　午後に電話をかけてくれませんか。（telephone）
7　床（floor）をモップでふいてください。（mop）
8　ハンマーでそのくぎ（nail）を打ってください。（hammer）
9　床にはカーペットを敷きたい。（carpet）
10 今朝床にワックスをぬりました。（wax）
11 父は毎朝バラ（roses）に水をやります。（water）
12 パン（bread）にバターをぬってくれませんか。（butter）
13 りんごを箱詰めしましょう。　（box）
14 ハムレット（Hamlet）は毎年夏に上演される。（stage）
15 クッション（cushion）を風に当てよう。（air）
16 その報告書（report）はファイルに入れました。（file）
17 リボン（ribbons）を色別に（by color）あつめましょう。（group）
18 母は糸（thread）を指にくるりと巻いた。（curl）
19 旅行小切手（traveler's check）はどこで現金にできますか。
20 レンガ（bricks）を積み上げなさい。（pile）

表1

問題	解答例	etc.	v.i.	日本語	無記入
1	referee(9), be(16) play(11) do(10) work(9) perform(2)	1	2	11	1
2	nurse(63)	0	1	3	5
3	pilot(37), be(21) control(2)	2	0	4	6
4	guard(69)	0	0	1	2
5	button(2), put(25) hang(5)	7	2	25	6
6	telephone(43), call(13) give(4) make(4)	3	1	0	4
7	mop(15), clean(9)	3	14	27	4
8	hammer(7), hit(46) knock(2) strike(2)	3	0	10	2
9	carpet(0), put(24) set(5) sheet(3) cover(2)	4	3	27	4
10	wax(20), paint(4)	7	16	18	7
11	water(28), give(26) take(2)	4	3	5	4
12	butter(1), put(16) spread(4) paint(3)	3	2	34	9
13	box(11), put(27) make(2) pack(2) take(2)	6	0	18	4
14	stage(9), play(22) be(7) hold(3) perform(3)	2	17	7	2
15	air(11), put(5) make(3) expose(2) give(2) take(2)	5	1	25	16
16	file(21), put(25) be(8) make(2)	1	2	7	6
17	group(32), collect(15), make(9), gather(6), divide(2)	1	0	3	4
18	curl(37), make(5) roll(4)	0	0	13	13
19	cash(10), change(34), exchange(15)	2	1	6	4
20	pile(56), make(3)	0	3	5	5

表2